

中高年期の介護とウェルビーイング

—ワーク・ファミリー・コンフリクトに着目して—

菊澤 佐江子

(法政大学社会学部)

【要旨】

少子高齢化の下、わが国では、まだ働き盛りの中高年期に身近な親族の介護に直面することが一般化しつつある。先行研究では、わが国の就業者が一定以上の介護において家族領域と就業領域の狭間で葛藤し対応を迫られる傾向にある可能性や、介護がウェルビーイングの低下を伴う傾向にあること等が示唆されている。しかし、日本の就業者における介護とウェルビーイングの関連が、どの程度家族—就業領域間で生じた葛藤に媒介されているのかを検討した研究は、未だ限られる。本研究は、中高年就業男女が家族の介護を担うことによって生じるワーク・ファミリー・コンフリクトに着目しつつ、介護が中高年就業男女のウェルビーイングに及ぼす影響とそのメカニズムを探索的に検討した。

分析の結果、まず、40歳以上で働いている者のうち、女性では12.2%、男性でも5.5%の者が、自ら中心となって介護を行っており、その半数以上が実親の介護であることが明らかとなった。また、実親又は配偶者を介護している就業女性は、非介護の就業女性よりFWCが高く、配偶者を介護している就業男性は、非介護の就業男性よりWFCが高い傾向がみられた。そして、中高年就業女性については、実親及び配偶者の介護とウェルビーイングの間に負の関連がみられ、その関連の一部は、FWC/WFCによって媒介されている可能性が示された。

キーワード： 介護、ウェルビーイング、役割葛藤、ジェンダー、続柄

1. 研究の目的

少子高齢化の進展に伴い、わが国では、中高年期のどこかで身近な親族の介護を行うことが、人々のライフコースにおいて一般化しつつある(菊澤 2007)。「平成28年社会生活基本調査」(総務省 2016: 7)によると、「15歳以上でふだん家族を介護している人」の数は、1991年から2016年までの約25年間に356万5千人から698万7千人へと倍増している。人口に占める介護者の割合は、特に、親の介護ニーズが高まる中高年期に高く、2016年現在、50~60歳代の10人に一人以上が介護を担う状況にある。一方、近年の中高年期は、男女ともに働くことが一般的かつ自らの生活を維持するうえで重要な年代となっている(内閣府 2015: 76-79)。1970年と2019年を比較すると、50代後半から60代

前半の労働力率は後者で高く、たとえば、55歳～59歳男性では91.2%から93.2%、女性では48.7%から74.7%、60歳～64歳男性では81.5%から84.4%、女性では39.1%から59.9%へと、過去40年の間に、特に女性において顕著に増加したことが明らかである（労働政策研究・研修機構 2021）。かくして、現在の中高年者は、就業が日常である最中に身近な親族の介護ニーズに直面するリスクに、以前より高い確率で晒されている。

こうした状況下、中高年者は、この一見相矛盾する二つの役割（就業と介護）をどのように担っているのだろうか。介護と就業については、わが国の就業者が一定以上の介護において役割葛藤を経験し就業時間を減らす・離職する等の対応を迫られる傾向にある可能性が示唆されている（菊澤・植村 2019; Kikuzawa & Uemura 2020）。また、介護を担うことがウェルビーイングの低下を伴う傾向にあることを示唆する研究蓄積もある（Oshio 2014; Kikuzawa 2015）。しかし、わが国の就業者が介護を担うことによりどの程度の役割葛藤を経験し、それがどの程度介護とウェルビーイングの負の関連に寄与しているのかを検討した研究は、現時点では未だ限られる。本研究は、NFRJ18を用いた分析を通じて、こうした研究上の欠落を補うことを目的としている。より具体的には、中高年就業男女が家族の介護を担うことによって生じるワーク・ファミリー・コンフリクトに着目しつつ、介護が中高年就業男女のウェルビーイングに及ぼす影響とそのメカニズムを探索的に分析する。

2. 先行研究

介護と就業など複数の役割を担うこと（役割累積）がウェルビーイングに及ぼす影響については、かつて、二つの理論的立場から、役割ストレイン仮説と役割累積仮説という相異なる仮説が提示されてきた（稲葉 1995）。役割ストレイン仮説によると、複数の役割を担うことは、相互に異なる役割期待に直面することで生じる役割葛藤や、物理的な時間やエネルギーへの要請が多大となることで生じる役割過重による役割ストレインを生じ、個人のウェルビーイングを悪化させると予想される（Goode 1960; Merton 1957）。役割累積仮説によると、複数の役割を保有することは、資源や特権の獲得、人生の目的や意味、行動指針等の物理的・心理的な利益をもたらすことから、ウェルビーイングを向上させると予想される（Thoits 2003; Sieber 1974）。そして近年は、役割累積がウェルビーイングに及ぼす影響は一義的なものではなく、それらの役割の文脈に依存するとする役割文脈仮説のもと、様々な実証研究が蓄積されている（Aneshensel and

Pearlin 1987; Moen et al. 1992)¹。

たとえば、役割累積とウェルビーイングとの関連は、文化的な文脈に根差したものであることが指摘されている (Jackson 1997; Kikuzawa 2006)。特に、家族 (とりわけ女性) が主たるケア役割を担うことを想定する家族主義的福祉国家においては、男女が共に働き共にケアする文化を促進する北欧型の社会民主主義的福祉国家に比べ、働きながらケア等の家族責任を果たすことが役割葛藤を伴いやすいという知見にもとづく (Collins 2020)、福祉国家のあり方も、役割累積とウェルビーイングとの関連を考える上で重要な文脈と考えられる。また、役割累積を構成する役割の種類も、重要な文脈の一つであり、役割累積が、義務的な役割のみならず、自発的な役割も含む場合は、役割累積とウェルビーイングとの間に正の関連がみられる傾向にあることが示されており、その理由として、自発的な役割は義務的な役割に比べ要請される時間やエネルギーや関与が少ないことや、その役割を担うことのコストがメリットを上回る場合に、役割を担わないという選択が比較的容易であることなどが考察されている (Thoits 2003)。

一連の議論は、日本社会において、介護が働く中高年男女のウェルビーイングに及ぼす影響を考えるうえで、貴重な示唆を提示している。たとえば、「並外れて強い家族主義」 (Espin-Andersen 1999=2000: 137) が指摘される日本の福祉政策の特徴を考慮すると、こうした社会状況の下で、働きながら介護等の家族責任を果たすことは、相対的に役割葛藤を伴いやすく、ウェルビーイングの悪化を生じやすいと考えられる。ただしこのことは、性別や続柄に関わらず全ての家族介護がウェルビーイングを悪化させることを意味するものではない。たとえば、身近な家族・親族に介護が必要になったとき、その介護を誰が担うべきかについての役割期待は、性別役割分業のもとでは、男性より女性に強く働くと考えられる。役割期待はまた、続柄にも依存する。現在の日本では、長男の嫁への期待が影をひそめる一方、配偶者や娘への介護期待が相対的に高い状況にある (大和 2008: 114)。こうした介護に関する期待の濃淡は、とりわけ社会的ケアが未成熟な状況下において、家族の介護ニーズに直面した当事者の介護をめぐる自己決定性 (選択性) に作用し、その介護役割の性格 (義務的 vs. 自発的) を規定するものと考えられる (上野 2011: 58-64)。このため、就業者における介護とウェルビーイングの関連は、ジェンダーや要介護者との関係性 (続柄) によって異なる可能性がある。

¹ 詳細は Kikuzawa (2006)、菊澤 (2001) のレビューを参照。

わが国の介護研究において、就業者の介護・役割葛藤・ウェルビーイングの関連を正面から扱った大規模な調査データにもとづく研究は未だ限られるが、地域サンプル等にもとづく関連知見として、就業をしながら介護をしている者の3割以上が「介護疲労」状態にある（井口 2017）、6割以上が何らかの就労ストレスをうったえている（菊澤 2013）、介護による体調悪化が仕事の能率低下を生じる傾向にある（池田 2014）等の報告がある。ただし、これらの研究においては、性別・続柄の異なる多様な介護者が、非介護者との比較において、どの程度こうした状況を経験しているのか、必ずしも十分に明らかにされていない。また、役割葛藤については、家族と就業に関する研究において、就業役割の要請が家族役割を遂行する上で支障となる側面（work-to-family conflict; WFC）と、家族役割の要請が就業役割を遂行する上で支障となる側面（family-to-work conflict; FWC）という二つの側面からなるワーク・ファミリー・コンフリクトに着目した研究が進められており（Kelly et al. 2014）、主に子育て期の男女を対象に、ワーク・ファミリー・コンフリクトとその関連要因について研究が蓄積される一方（吉田・南 2001; 杉野 2006; 西村 2006; 松田 2006; 裴 2006, 2011）、介護を経験することの多い中高年期における介護、ワーク・ファミリー・コンフリクトとウェルビーイングに関する研究はわが国では未だ限られる。

果たして、日本の中高年就業者は、介護によってどの程度のワーク・ファミリー・コンフリクトを経験しており、またそれは彼らのウェルビーイングとどのように関連しているのだろうか。本研究は、先行研究を踏まえ、以下の仮説を設定し、介護が中高年就業男女のウェルビーイングに及ぼす影響とそのメカニズムを、介護、ワーク・ファミリー・コンフリクト（WFC/FWC）、ウェルビーイングの相互の関連に着目しつつ探索的に検討する。

仮説 1 : 中高年就業者において、介護をしている者は、していない者に比べ、ワーク・ファミリー・コンフリクトを多く経験する傾向にある。ただし、その傾向は、性別や被介護者との続柄によって異なる。

仮説 2 : ワーク・ファミリー・コンフリクトが高い者はウェルビーイングがよくない傾向にある。

仮説 3 : 中高年就業者のうち、介護をしている者は、していない者に比べ、ウェルビーイングの状態がよくない傾向にある。こうした負の関連の一部は、ワーク・ファミリー・コンフリクトによって媒介されている。

3. 方法

3.1 分析対象

分析に先立ち、男女の各ライフステージにおける介護・就業経験の全体状況を把握するために、NFRJ18 の調査対象者で就業・介護について欠損値がなかった者（男性 1,408 人、女性 1,581 人）を 10 年刻みの年齢に分け、各年齢における就業率と介護率をグラフ化した（図 1、図 2）。就業率は「（調査時点において）収入を伴う仕事についている」ケースを 1、その他を 0 とし、介護率は「（調査時点において）自分が中心となって介護（ケア）している家族がいる」ケースを 1、その他を 0 として計算した。

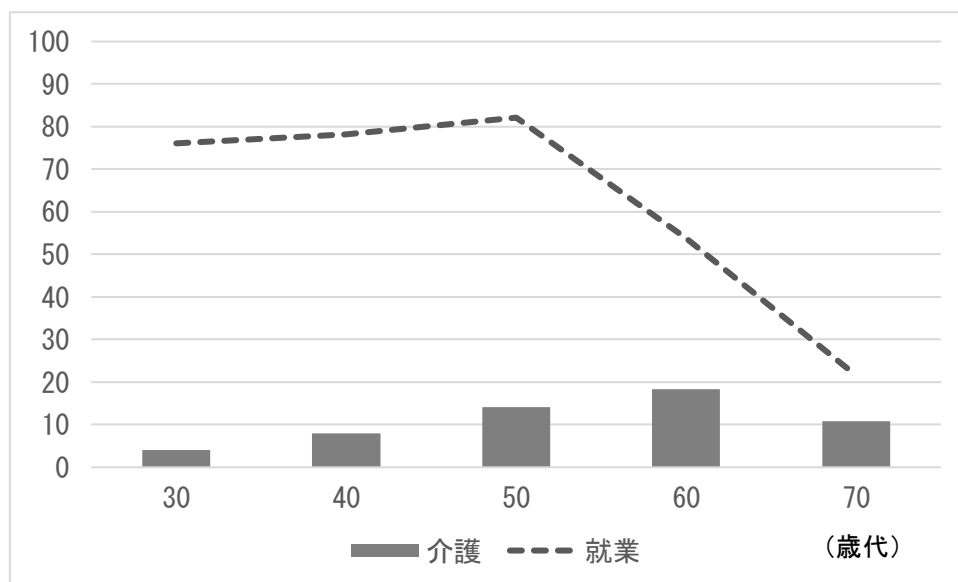


図 1. 女性の就業と介護一年齢別役割保有率 (%)

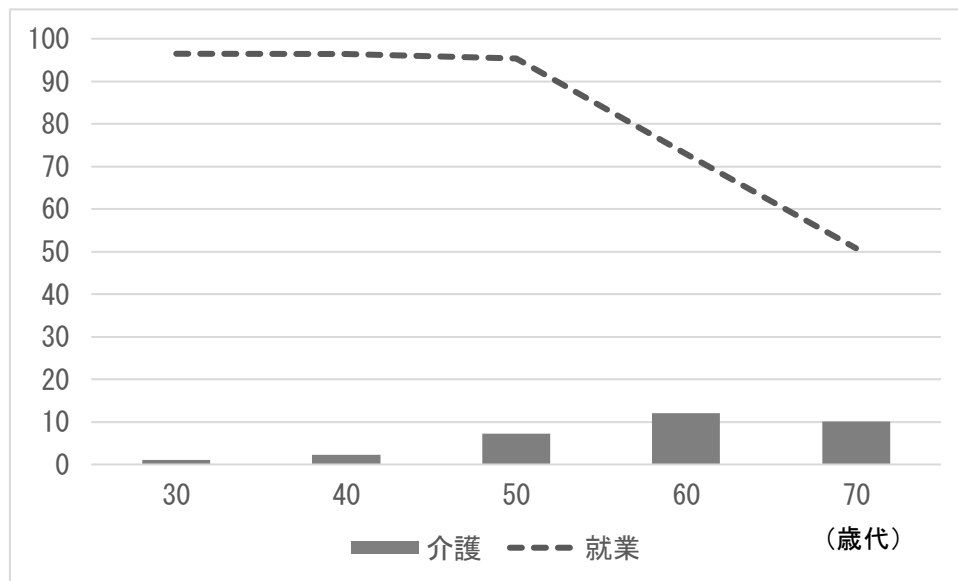


図 2. 男性の就業と介護一年齢別役割保有率 (%)

結果 (図 1、図 2) によると、まず、就業率は男女ともに 50 歳代まで高く、50 歳代では、男性回答者の 9 割以上、女性回答者の 8 割以上が就業している。60 歳代以降、就業率は低下するが、70 歳代前半でも女性の約 2 割、男性の約 5 割が就業している。一方、介護率は、40 歳代から 60 歳代にかけて徐々に高まり、60 歳代では女性の約 2 割、男性の約 1 割が、70 歳代でも男女ともに約 1 割が自ら中心となって介護を行っている。本研究は、このうち就業と介護の問題に直面する可能性の高い 40 歳代以上に着目し、調査時点で就業しており、分析に使用した全ての変数に欠損がない 40 歳～73 歳の回答者 (男性 887 人、女性 776 人) を分析対象とする。

3.2 変数

従属変数は、ワーク・ファミリー・コンフリクト (FWC, WFC) とウェルビーイング (ディストレス、生活満足度) である。ワーク・ファミリー・コンフリクト (FWC, WFC) は、NFRJ18 に含まれている二項目を使用した。具体的には、FWC については「家族のあれやこれやで思うように仕事に時間を配分できない」、WFC については「仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分とれない」という質問項目への回答を、「あてはまる」=3 点、「まああてはまる」=2 点、「あまりあてはまらない」=1 点、「ほとんどあてはまらない」=0 点と得点化した。

ディストレスは CES-D (Center for Epidemiological Studies Depression Scale) の

短縮版を使用した。本研究では NFR18 に含まれる CES-D 項目のうちうつ感情・身体的症状に関わる 11 項目の質問項目への回答を、「まったくなかった」=0 点、「週に 1~2 回」=1 点、「週に 3~4 回」=2 点、「ほとんど毎日」=3 点と得点化したうえで、その合計値を尺度として使用した²。

生活満足度は、「現在の生活全体にどのくらい満足されていますか」という質問項目への回答を「かなり満足」=4 点、「どちらかといえば満足」=3 点、「どちらかといえば不満」=2 点、「かなり不満」=1 点と得点化した。

独立変数は、各続柄の家族に対する調査時点における介護の有無（有=1、無=0）である。「現在、あなた自身が中心になって介護（ケア）されている方はいますか」「それはどなたですか」という質問への回答をもとに、家族介護（全体）、自分の親の介護、義理の親の介護、配偶者の介護、自分の子どもの介護、その他親族（自身の兄弟姉妹、自分の祖父母、配偶者の祖父母、その他）の介護の実施の有無について、計 5 つのダミー変数（介護有=1、介護無=0）を作成した。このほか、制御変数として、年齢（歳）、学歴ダミー（大学卒業以上=1、その他=0）を用いた³。

3.3 分析方法

分析にあたっては、はじめに本研究で使用する変数の記述統計量を男女別に計算して、分析対象者の特性を確認するとともに、男女間の差異を、t 検定または χ^2 検定により検討する。次に、ワーク・ファミリー・コンフリクトを従属変数、各続柄の介護を独立変数とする重回帰分析を行う。最後に、ウェルビーイング（ディストレス、生活満足度）を従属変数とする二つのモデル（各続柄の介護を独立変数とするモデル 1、モデル 1 の独立変数にワーク・ファミリー・コンフリクトを加えたモデル 2）について重回帰分析を行う。重回帰分析は、男女それぞれについて行うが、別途、男女統合サンプルについて、各モデルの変数と性別の交互作用を式に含む重回帰分析を行い、介護と性別の交互作用項から、介護の影響のジェンダー差について統計的検証を行った。

² CES-D 項目について回答パターンに盲従化傾向がみられたケースは、分析から除外した。

³ 本研究では、介護、ワーク・ファミリー・コンフリクト、ウェルビーイングの 3 変数の関連パターンを探索的に検討し概観するという見地に立ち、使用する変数を最小限に、可能な限り多くのサンプルを用いて分析を行った。より多くの変数を用いた詳細な分析は、今後の課題としたい。

4. 分析結果

表1は、分析対象者（中高年就業者）について、分析に用いた変数の記述統計量を計算した結果である。平均年齢は男性（54.2歳）が女性（53.1歳）より若干高く、大学卒業以上の者の割合も男性（37.8%）が女性（15.9%）より高い。WFCも男性に高い傾向がみられたが、ディストレスは女性に高い傾向がみられ、FWCや生活満足度については男女に有意な差はみられなかった。

表2は、分析対象者の介護率を計算した結果である。結果は、働く中高年女性の12.2%、男性の5.5%が、主介護者として家族の介護（ケア）を行っていることを示している。続柄別にその内訳をみると、実親の介護が群を抜いて多く、全介護者の半数以上（女性全体の6.7%、男性全体の3.9%）を占める。これに比べると少ないが、次に多いのが義理の親の介護であり（女性3.6%、男性1%）、この二つの続柄をあわせたいわゆる「親の介護」が、40歳～73歳の働く男女が行っている介護の8割以上を占めている。一方、この年代において、配偶者や子どもの介護を行っている者はかなり限られ、また、その他の続柄の親族を介護している者はほとんどいない。

男女の介護率を比較すると、就業中という状況下においても、女性の家族介護率は男性の2倍以上と顕著に多いことが明らかである。続柄別にみると配偶者介護を除くすべての続柄において、女性の介護率は男性より有意に高く、特に義理の親の介護率の差が顕著となっている。

表1. 変数の基本統計量—分析対象サンプル¹⁾

変数名	女性 (N=776)		男性 (N=887)		統計的差異
	平均 /%	標準偏 差	平均 /%	標準偏 差	
Family-to-Work Conflict (FWC)	0.7	(0.8)	0.6	(0.7)	
Work-to-Family Conflict (WFC)	0.9	(0.9)	1.1	(1.0)	***
ディストレス (CES-D)	4.9	(5.1)	4.2	(4.8)	**
生活満足度	2.9	(0.6)	2.9	(0.6)	
年齢 (歳)	53.1	(8.4)	54.2	(9.1)	*
学歴ダミー (大学卒業以上=1,その他=0)	15.9%		37.8%		***

* p<.05; ** p<.01; *** p<.001

¹⁾ 調査時点で就業しており表1～3の全変数に欠損がない40～73歳の回答者

表 2. 中高年就業者の家族介護率²⁾(%)—続柄・男女別

	女性 (N=776)	男性 (N=887)	統計的差異
家族介護（全体）	12.2	5.5	***
実親の介護	6.7	3.9	*
義理の親の介護	3.6	1.0	***
配偶者介護	1.0	0.5	
子どもの介護	1.4	0.2	**
その他親族の介護	0.5	0.0	*

* p<.05; ** p<.01; *** p<.001

²⁾ 分析対象サンプル中、調査時点で介護している者の割合

表 3 は、就業者の介護とワーク・ファミリー・コンフリクトの関連に関する重回帰分析の結果である。各続柄における介護を独立変数としたが、「その他親族の介護」は実施している男性が 0 人だったため、変数から除外した。まず、就業女性については、実親または配偶者の介護を行っている場合にそうでない場合と比べ FWC が有意に高い傾向がみられた。就業男性については、配偶者介護を行っている場合にそうでない場合と比べ WFC が有意に高い傾向がみられた。ただし、これらの介護変数と性別の交互作用項に統計的に有意なものはいずれもみられなかった。

表 3. 介護とワーク・ファミリー・コンフリクトの関連（重回帰分析の結果）
—中高年就業者、男女別

変数	FWC		WFC		
	女性	男性	女性	男性	
実親の介護 ^a	0.44 *** (0.11)	0.22 (0.12)	[0.23 (0.13)	-0.20 (0.17)]
義理の親の介護 ^a	0.13 (0.15)	0.03 (0.23)	-0.25 (0.18)	0.45 (0.33)	
配偶者介護 ^a	0.83 ** (0.28)	0.50 (0.35)	0.35 (0.33)	1.11 * (0.49)	
子どもの介護 ^a	-0.22 (0.23)	0.46 (0.49)	[-0.49 (0.28)	1.02 (0.69)]
定数	1.32 *** (0.18)	1.24 *** (0.14)	1.79 *** (0.21)	2.78 *** (0.20)	
N	776	887	776	887	
R ²	0.06	0.03	0.04	0.08	

* p<.05; ** p<.01; *** p<.001 ^a 続柄別介護ダミー（有=1、無=0）

注. 表中、各変数の上段の数値は非標準化係数、下段（ ）内の数値は標準誤差. []は男女全体について変数と性別の交互作用を含めた重回帰分析を行った結果、当該変数と性別の交互作用が有意（p<.05）であったことを示す.モデルは年齢（歳）、学歴ダミー（大学卒業以上=1、その他=0）について統制済み（表記割愛）

表 4 は、就業者の介護、ワーク・ファミリー・コンフリクトとウェルビーイングの関連についての重回帰分析の結果である。まず、就業女性については、モデル 1 において、実親の介護または配偶者の介護を行っている場合にそうでない場合と比べディストレスが有意に高く、生活満足度が有意に低い傾向がみられた。ただし、FWC, WFC を投入すると、モデル 2 の結果に示されているように、FWC, WFC がディストレスとの間に有意な正の関連を示す一方、実親の介護・配偶者の介護とディストレスの間に有意な関連はみられなくなり係数も減少した。生活満足度においても、FWC, WFC の投入後のモデル（モデル 2）において、FWC, WFC は生活満足度との間に有意な負の関連を示し、実親の介護・配偶者の介護の係数も減少したが、子どもの介護と生活満足度との関連には、そのような変化がみられなかった。就業男性については、モデル 2 において、FWC, WFC とディストレスとの間に有意な正の関連、FWC と生活満足度との間に有意な負の関連がみられたものの、いずれのモデルにおいても、介護とウェルビーイング（ディストレス・生活満足度）との間に関連はみられなかった。また、表 4 のモデルにおいて、介護変数と性別の交互作用項に統計的に有意なものはいずれもみられなかった。

表 4. 介護、ワーク・ファミリー・コンフリクト、ウェルビーイングの関連
(重回帰分析の結果) — 中高年就業者、男女別

	ディストレス		生活満足度	
	モデル 1	モデル 2	モデル 1	モデル 2
【女性 (N=776)】				
実親の介護 ^a	1.67 *	0.99	-0.28 **	-0.22 **
	(0.73)	(0.72)	(0.09)	(0.09)
義理の親の介護 ^a	-0.07	-0.09	0.08	0.07
	(0.98)	(0.95)	(0.12)	(0.11)
配偶者介護 ^a	4.52 *	3.28	-0.54 *	-0.45 *
	(1.84)	(1.80)	(0.22)	(0.22)
子どもの介護 ^a	1.86	2.41	-0.45 *	-0.50 **
	(1.57)	(1.53)	(0.19)	(0.18)
FWC		1.26 ***		-0.09 **
		(0.26)		(0.03)
WFC		0.57 **		-0.07 **
		(0.21)		(0.03)
定数	5.43 ***	2.76 *	2.56 ***	2.80 ***
	(1.18)	(1.21)	(0.14)	(0.15)
R ²	0.02	0.08	0.06	0.09
【男性 (N=887)】				
実親の介護 ^a	-0.04	-0.22	-0.18	-0.16
	(0.83)	(0.81)	(0.11)	(0.11)
義理の親の介護 ^a	-0.92	-1.18	-0.04	-0.02
	(1.60)	(1.56)	(0.22)	(0.21)
配偶者介護 ^a	0.35	-0.84	0.06	0.16
	(2.40)	(2.34)	(0.32)	(0.32)
子どもの介護 ^a	-0.02	-1.11	-0.47	-0.38
	(3.38)	(3.29)	(0.45)	(0.45)
FWC		1.24 ***		-0.11 **
		(0.24)		(0.03)
WFC		0.51 **		-0.04
		(0.17)		(0.02)
定数	6.60 ***	3.65 **	2.60 ***	2.84 ***
	(0.99)	(1.07)	(0.13)	(0.15)
R ²	0.01	0.06	0.02	0.04

* p<.05; ** p<.01; *** p<.001 ^a 続柄別介護ダミー (有=1、無=0)

注. 表中、各変数の上段の数値は非標準化係数、下段 () 内の数値は標準誤差. [] は男女全体について変数と性別の交互作用を含めた重回帰分析を行った結果、当該変数と性別の交互作用が有意 (p<.05) であったことを示す. モデルは年齢 (歳)、学歴ダミー (大学卒業以上=1、その他=0) について統制済み (表記割愛)

5. 考察

本研究は、介護が中高年就業男女のウェルビーイングに及ぼす影響とそのメカニズムを、介護、WFC/FWC とウェルビーイングの関連に着目しつつ探索的に検討した。まず、記述的な分析の結果、40歳以上で働いている者のうち、女性では12.2%、男性でも5.5%の者が、主介護者として介護を担っており、その半数以上が実親の介護であることが明らかとなった。義理の親を介護している者は、実親介護に比べると少なく、女性で全介護の3割未満、男性で2割未満であった。また、男女間の比較では、配偶者介護を除くすべての介護で、女性の介護実施率が男性より高い傾向が観察された。性別・続柄ごとの介護率は、現在の高齢者をめぐる家族状況や、介護をめぐる規範・期待の現状を反映した結果と考察される。

介護とWFC/FWCの関連については、仮説1で予想した通り、介護とWFC/FWCの間に概ね正の関連が示される一方、その関連のあり方は被介護者との続柄によって異なることが明らかとなった。具体的には、女性において、実親の介護や配偶者介護を行っている者には、非介護者に比べFWCが高く、男性については、配偶者介護を行っている者にWFCが高い傾向がみられた。一方、義理の親の介護や子どもの介護については、男女ともにこうした関連はみられなかった。介護・FWC/WFC・ウェルビーイングの関連については、仮説2の予想通り、男女ともに、FWC/WFCとウェルビーイングの間には負の関連が観察され、仮説3も部分的に支持された。具体的には、女性について、実親及び配偶者の介護とウェルビーイングの間に負の関連がみられ、その関連の一部は、FWC/WFCに媒介されていることが示された。結果は、役割ストレイン仮説の想定通り、少なくとも実親または配偶者の介護を行っている就業女性は、介護を行っていない就業女性に比べ、就業一家族領域間での役割葛藤を経験しやすく、このことがウェルビーイングの低下を招いている可能性を示唆している。

なお、就業男性については、介護とウェルビーイングの間に有意な関連がみられなかった。介護とウェルビーイングの関連は、男性では女性ほど明瞭ではないことが先行研究においても示唆されており(菊澤 2013, 2011)、男性に特有の、「中心として介護を行う」ことに関する認識や(中西 2009)、ディストレス表現(Horwitz et al. 1996)、家族や介護協力者の状況、サービスの利用状況やその効果のあり方(菊澤 2013, 2011)等が関連している可能性が考えられるものの、今後、就業男性に関するより詳細なデータを用いて検証する必要がある。また、本研究では、介護とFWC/WFC・ウェルビーイングの関連についても、統計的に

有意なジェンダー差はほとんどみられなかった。結果はサンプル数の制約を一部反映している可能性もあることから、今後はより大きいサンプルを用いた検討も必要と考えられる。

本研究は、様々な続柄の家族介護について、働きながら介護をしている者が介護をしていない就業者との比較において、どの程度ワーク・ファミリー・コンフリクトを経験しているのか、介護とウェルビーイングとの関連がワーク・ファミリー・コンフリクトによってどの程度媒介されているのかを明らかにした。研究の主眼は、男女における続柄の異なる介護・FWC/WFC・ウェルビーイングの関連の全体的なパターンをつかむことにあり、介護と FWC/WFC・ウェルビーイングの関連がなぜ続柄ごとに異なるのか、といったより詳細なメカニズムの検討は、今後の課題として残されている。たとえば、介護と FWC/WFC・ウェルビーイングの関連が介護の続柄によって異なるという結果には、続柄による介護期待の相違という文化・社会的文脈が関連する可能性のほか、各続柄の介護に特有の就業状況、家族状況等も関連している可能性がある。

たとえば、就業状況について、各続柄の介護を行っている者のサンプル特性を比較すると、実親や配偶者を介護している女性は、それ以外の介護をしている女性に比べ、正規雇用者が多く、義理の親を介護している者には自営業（家族従業者を含む）、子どもの介護をしている者にはパートタイム就業者が相対的に多くみられた。就業時間の長さや柔軟性の有無が FWC/WFC と関連しているとすれば(Schieman et al. 2009)、各続柄の介護と FWC/WFC の関連の相違は、こうした就業状況の差異を一部反映している可能性がある。各続柄の介護を行っている者のサンプル特性には、このほかにもいくつかの点で相違がみられることから、各続柄の介護と FWC/WFC の関連の相違が何に起因するものであるかについては、今後より詳細な分析を行う中で明らかにする必要がある。

また、本研究では、データ上の制約から、使用するウェルビーイングの種類が限られた。ディストレス等の表現のあり方が男女間で異なるといった可能性を踏まえると(Horwitz et al. 1996)、より多様なウェルビーイング変数を用いて今回のモデルを分析した場合、異なる結果が得られる可能性がある。役割葛藤に関する変数も、本研究では FWC/WFC 各一項目を使用した。分析上は、複数の項目からなる尺度を使用するほうが望ましい。複数の項目からなる尺度を含め、多様な役割葛藤の尺度を用いて、今回のモデルを検討することも、今後の課題である。

[謝辞]

本研究は JSPS 科研費 (JP17H01006、17K04258、20H05804) の助成を受けています。NFRJ18 は日本家族社会学会・NFRJ18 研究会 (研究代表: 田淵六郎) が企画・実施した調査で、本研究では ver2.0 データを利用しています。

[備考]

NFRJ18 の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。
(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

- Aneshensel, Carol S. and Leonard I. Pearlin, 1987, "Structural Contexts of Sex Differences," Rosalind C. Barnett, Lois Beiner, and Grace K. Baruch eds., *Gender and Stress*, New York: The Free Press, 75-95.
- 裊智恵, 2006, 「共働き家族の男性における役割葛藤とディストレス——稼ぎ手役割意識と配偶者からの情緒的サポートによる緩衝効果」西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子 (編) 『第2回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第2次報告書 No.1: 夫婦、世帯、ライフコース』日本家族社会学会 全国家族調査委員会, 61-74.
- , 2011, 「夫婦の働き方とワーク・ファミリー・コンフリクト——夫婦の職業形態別にみたワーク・ファミリー・コンフリクトの規定要因」田中重人・永井暁子 (編) 『第3回家族についての全国調査 (NFRJ08) 第2次報告書 第1巻 家族と仕事』日本家族社会学会 全国家族調査委員会, 11-127.
- Collins, Caitlyn, 2020, "Who to Blame and How to Solve It: Mothers' Perceptions of Work-Family Conflict Across Western Policy Regimes," *Journal of Marriage and Family*, 82: 849-874.
- Esping-Andersen, Gosta, 1999, *Social Foundations of Postindustrial Economics*, Oxford University Press. (=イエスタ・エスピナー・アンデルセン 2000 『ポスト工業経済の社会的基礎』桜井書店) .
- Goode, William J., 1960, "A Theory of Role Strain," *American Sociological Review*, 25: 483-96.
- Horwitz, Allan V., Helene Raskin White and Sandra Howell-White, 1996, "The Use of Multiple Outcomes in Stress Research: A Case Study of Gender

- Differences in Responses to Marital Dissolution," *Journal of Health and Social Behavior*, 37(3): 278-291.
- 井口克郎, 2017, 「介護保障抑制政策下における在宅介護者の実態」『日本医療経済学会会報』33(1): 5-32.
- 池田心豪, 2014, 「介護疲労と休暇取得」『日本労働研究雑誌』643: 41-48.
- 稲葉昭英, 1995, 「性差、役割ストレス、心理的ディストレス」『家族社会学研究』7: 94-104.
- Jackson, Pamela Braboy, 1997, "Role Occupancy and Minority Mental Health," *Journal of Health and Social Behavior*, 38: 237-55.
- Kelly, Erin L., Phyllis Moen, J. Michael Oakes, Wen Fan, Cassandra Okechukwu, Kelly D. Davis, Leslie B. Hammer, Ellen Ernst Kossek, Rosalind Berkowitz King, Ginger C. Hanson, Frank Mierzwa and Lynne M. Casper, 2014, "Changing Work and Work-Family Conflict: Evidence from the Work, Family, and Health Network," *American Sociological Review*, 79(3): 485-516.
- 菊澤佐江子, 2001, 「男女にみるエイジング・役割累積・ディストレス」『社会学評論』52(1): 2-15.
- , 2007, 「女性の介護—ライフコース視点からの考察」『福祉社会学研究』4: 99-119.
- , 2011, 「ジェンダーと介護ストレス—高齢者介護の場合」『家族関係学』30: 179-187.
- , 2013, 「ジェンダーと老親介護におけるストレス過程」『季刊家計経済研究』98: 35-45.
- Kikuzawa, Saeko, 2006, "Multiple Roles and Mental Health in Cross-Cultural Perspective: The Elderly in the United States and Japan," *Journal of Health and Social Behavior*, 47: 62-76.
- , 2015, "Elder Care, Multiple Role Involvement, and Well-Being Among Middle-Aged Men and Women in Japan," *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 30(4): 423-438.
- 菊澤佐江子・植村良太郎, 2019, 「中高年女性における介護と就業の相互の関係—二時点パネルデータ分析による検討」『老年社会科学』41(1): 9-17.
- Kikuzawa, Saeko, Ryotaro Uemura, 2020, "Parental Caregiving and Employment among Midlife Women in Japan," *Research on Aging*, 43(2): 107-118.

- 松田茂樹, 2006, 「育児期の夫と妻のワーク・ファミリー・コンフリクト——合理性見解対ジェンダー役割見解」『家族社会学研究』18(1): 7-16.
- Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Glencoe, IL: The Free Press.
- Moen, Phyllis, Donna Dempster-McClain and Robin M. Williams, Jr., 1992, "Successful Aging: A Life-course Perspective on Women's Multiple Roles and Health," *American Sociological Review*, 97 (6): 1612-38.
- 内閣府, 2015, 「平成 27 年度 年次経済財政報告 第 2 章 成長力強化に向けた労働市場の課題」(2016 年 9 月 21 日取得, http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je15/pdf/p02011_1.pdf) .
- 中西泰子, 2009, 『若者の介護意識——親子関係とジェンダー不均衡』勁草書房.
- 西村純子, 2006, 「ライフステージ、ジェンダー、ワーク・ファミリー・コンフリクト——ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定要因と生活の質との関連」西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子(編)『第 2 回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第 2 次報告書 No.1: 夫婦、世帯、ライフコース』日本家族社会学会 全国家族調査委員会, 75-88.
- Oshio, Takashi, 2014, "The Association between Involvement in Family Caregiving and Mental Health among Middle-Aged Adults in Japan," *Social Science & Medicine*, 115: 121-129.
- 労働政策研究・研修機構, 2021, 「早わかり グラフでみる長期労働統計 II 労働力、就業、雇用 図 3-2 年齢階級別労働力率」(2021 年 3 月 9 日取得, https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0203_02.html) .
- Schieman, Scott, Melissa A. Milkie and Paul Glavin, 2009, "When Work Interferes with Life: Work-Nonwork Interference and the Influence of Work-Related Demands and Resources," *American Sociological Review*, 74(6): 966-988.
- Sieber, Sam D., 1974, "Toward a Theory of Role Accumulation," *American Sociological Review*, 39: 567-78.
- 総務省統計局, 2016, 「平成 28 年社会生活基本調査——生活時間に関する結果結果の概要 平成 29 年 9 月 15 日」(2021 年 3 月 24 日取得, <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf>) .
- 杉野勇, 2006, 「ワーク・ファミリー・フィットの尺度構成——仕事と家庭の軋轢と相互促進」『現代社会学研究』19: 1-20.

- Thoits, Peggy, 2003, "Personal Agency in the Accumulation of Multiple Role-Identities," Peter J. Burke, Timothy J. Owens, Richard Serpe, and Peggy A. Thoits eds., *Advances in Identity Theory and Research*, New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers, 179-94.
- 上野千鶴子, 2011, 『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
- 大和礼子, 2008, 『生涯ケアラーの誕生——再構築された世代関係／再構築されないジェンダー関係』学文社.
- 吉田悟・南隆男, 2001, 「「家族領域から仕事領域への葛藤」の規定要因と女性の就業行動との関係」嶋崎尚子（編）『家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No.2 第7巻 家族と職業』日本家族社会学会 全国家族調査 (NFR) 研究会, 25-39.

Family caregiving and wellbeing in mid to late adulthood: Examining the mediating effect of work–family conflicts

**Saeko Kikuzawa
(Hosei University)**

As a result of the declining birthrate and an aging population, more Japanese men and women today need to take care of their older relatives while in their mid to late adulthood when they may still be working. Previous studies indicate that Japanese workers who face the need to take care of family members are likely to experience conflicts between their family and workplace responsibilities, and that caregiving may be negatively associated with their wellbeing. However, we do not yet know how much of the negative associations between caregiving and wellbeing among Japanese workers are a result of their family and work conflicts. This study tries to fill this gap by exploring the effects of caregiving on work-to-family conflict (WFC) and family-to-work conflict (FWC) and wellbeing among working men and women in their mid to late adulthood, using NFRJ18 datasets.

The descriptive analyses show that, among workers over 40 years old, 12.2% of women, and 5.5% of men provide care for their family members as primary caregivers, and that more than half of them are caregivers providing care for their own parents. The regression analyses show a higher level of FWC among working women who provide care for their parents and those who provide care for their spouse than their non-caregiving counterparts, and a higher WFC among working men who provide care for their spouse than their non-caregiving counterparts. Among working women, a negative association between caregiving and wellbeing was observed for those providing care for their own parents and those providing care for their spouse, and it was shown that those associations were partly mediated by FWC/WFC.

Key words: caregiving, wellbeing, role conflicts, gender, family relationship